2025.8.6.
T.Kobayashi

二冊の書籍といくつかの奇縁 その２

次なる歩みの始まり

<1> 作家・評論家小野勝美

小野勝美（おのかつみ）は、1944年に宮城県白石市で生まれた。山形大学卒業後、立教大学大学院に進み日本文学で修士課程を卒業。
卒業後は専修大学松戸高校で国語教師として教壇に立つ傍ら、研究活動を継続。主に歌人などの伝記を書き、若山牧水・前田夕暮などの伝記を手がけた。
また、釣りや旅に関する小説や随筆も書いており、その時には久和数美というペンネームを使った。独断的私見だが、このペンネームは「水渇く」または「水が湧く」のかな書き「みずかわく」を逆読みしたもので、渓流釣りに深入りした文学者ならではの発想のような気がする。
山形大学在学中に体調を崩して、一時故郷の白石市に戻って療養したことがあった。この時に友人が、仙台市にある宮城県出身の歌人原阿佐緒の歌碑の拓本を、鉛筆とざら紙でとって来てくれた。

家ごとにすもも花咲くみちのくの　春べをこもり病みてひさしも

入院加療中の小野勝美の心に食い込んだこの歌が、同郷の歌人原阿佐緒との運命の出逢いとなった。原阿佐緒の研究はここから始まり、療養を終えて山形大学に戻り、立教大学に進んだ後も続いた。
その結果、「原阿佐緒の生涯」「原阿佐緒全歌集」などを執筆し、原阿佐緒研究の第一人者となった。
小野勝美は、その著書の中で述べている。
「いくつかの恋愛事件のみが取り上げられて評価の対象となっており、歌人としての原阿佐緒の姿がきちんと残されていないことに気がついて、研究を深めていった」と。
小野勝美は、2021年8月に77才で他界。何と私と同年生まれで、しかも小学校5年生から6年生にかけて私が過ごした東北の山村の、隣町の出身の人だったのは驚きだった。

<2> 二冊の書籍との出逢い

2002年12月に他界した母の書架に残っていた書籍を少しずつ処分してきたが、どうしても捨てるという決断ができずに残してきた書籍が二冊ある。
「原阿佐緒全歌集」という箱入りの分厚い一冊と、小野勝美著の「原阿佐緒の生涯」。
小野勝美著「原阿佐緒の生涯」の中からは、新聞の切り抜きと何枚かのハガキが出てきた。
切り抜きとハガキを整理してみると、こんな流れがわかってきた。
昭和49年のある日の朝日新聞千葉版の切り抜きは、『専修大学松戸高校の教諭である小野勝美氏（30才）が「歌人原阿佐緒の生涯」を出版した』という記事。ゆくゆくは「全歌集」の出版も予定していることも書かれていた。
この新聞記事を見て、母は書籍入手を目的に小野勝美氏との接触を試みた。往復葉書の断片や受け取った返信の便箋が残っていたので、この間のやりとりがよくわかった。
そして、小野勝美氏からの返信の後、著者のサイン入りの一冊を購入した。(980 円)
後日出版された「原阿佐緒全歌集」も出版社への直接の申込みによって購入。この歌集は500部の限定出版（7,000 円）の中の一冊のようだった。
母としては、自分の母親（私から見れば祖母）の生家がある宮城県黒川郡の田舎から出た女流歌人で、しかも様々な話題を残して明治・大正・昭和の時代を駆け抜けた一人の女性として、原阿佐緒をよ

く知っていた。何度か茶飲み話に聞いたことがある。
その原阿佐緒の実像に迫りたいと思って、研究を重ねた小野勝美氏が「原阿佐緒の生涯」というタイトルで世に打ち出したことを新聞紙上で知り、読んでみたくなったという経緯を読み取ることができた。しかも著者の小野勝美氏は、母が生まれ育った宮城県伊具郡大張村の隣町である白石市の出身だとわかり、親近感からさらに加速したに違いない。
ここまでの経緯がわかったら、二冊の書籍を簡単に廃棄することができなくなってしまった。
インターネット上で原阿佐緒・小野勝美に関する情報を探していたら、宮城県黒川郡大和町に「原阿佐緒記念館」があることがわかった。4 月の中頃、原阿佐緒記念館宛に書簡を送ってみた。
書簡の要旨は、「貴重な書籍の寄付」を申し出る内容で、ここまでの経緯をしたためた。
そして、その応答を待つ間に、小野勝美著「原阿佐緒の生涯」だけを読んで見ることにした。箱入りの重厚な歌集を読み切る自信がなかったので、薄い本を選んだのが正直なところだった。

<3> もうひとつの奇縁

原阿佐緒が生まれた宮床村は、昭和30年（1955 年)に近隣の吉岡町・落合村・鶴巣村と合併して大和町（たいわちょう）となった。
明治6年5月、第七大学区宮城県管内第一中学校区黒川郡第四十四小学校区吉岡小学校が仮設校舎で開校した。現在の宮城県黒川郡大和（たいわ）町立吉岡小学校の誕生である。
明治9年に仮校舎から現在の場所に移転し、明治19年に高等小学校になった。
原阿佐緒は、明治28年に黒川郡の宮床尋常高等小学校に入学し、明治29年に吉岡尋常高等小学校に転校した。
現在の黒川郡大和町一帯は、古墳時代後期には豪族が住んでいた。
14世紀半ばに奥州管領大崎氏の初代当主大崎直持の配下の黒川氏直の所領となっていた。
天正18年（1590年）黒川晴氏が伊達氏に敗れて、伊達政宗の三男宗清が居城を構えた。
吉岡小学校が建った吉岡という所は、伊達宗清が築城した後、街作りが進められ、城下町・宿場町として栄えた。その後、吉岡は奥山氏・但木氏の統治下に移った。
一方伊達一族は、伊達宗房が宮床村に居館を構え、宮床伊達氏として幕末まで続いた。
吉岡尋常高等小学校の開校は明治6年で、初代校長となったのは、黒澤直之晋。
黒澤直之晋には三人の娘がいたが、そのひとりは宮城県伊具郡大張村の初代村長佐藤右膳の孫と結婚した。この女性は私の母方の祖母で、明治24年(1891年)に生まれて昭和43年(1968年)に他界した。祖母は、原阿佐緒と同郷で同時代の人だったので様々な事実を承知していたに相違ないし、それを娘達（私の母とその姉妹）に聞かせていたに違いない。
私の母が、「原阿佐緒の生涯」という書籍に出遭って心を動かされたのも頷けるような感じがしてきた。

<4> そして読み終わって

「原阿佐緒の生涯」だけを読んで、「原阿佐緒の実像に迫る」ことを目指した小野勝美の労作をじっくり味わって見ることにした。
一人の人間が生まれてから死ぬまでの足取りを丁寧にまとめており、その人となりが理解できた。しかし、率直に言って「ずしんと重みを感じる」一冊だった。
著者が原阿佐緒やその関係者への取材を重ね、自分の目で確認し歩いた労作は、巷間言い伝えられている「原阿佐緒像」とは少々異なっていることがわかった。スキャンダル報道で少々誤解・勘違いが

発生した上に興味本位からの歪曲も加わり、人から人へ、媒体から媒体へと伝承されていく内に変形が広がった部分も少なくないということがわかった。
私と同年齢の著者が20才の頃に、原阿佐緒の短歌に心動かされて研究を始めた。そして70才代半ばになっていた原阿佐緒本人への対面取材を繰り返し、既に他界した人も含め関係者やその家族との接触、関係した地域の訪問などの作業を積み重ねて、一冊の本にまとめたのは30才の時。
原阿佐緒の生涯の可視化という成果もさることながら、小野勝美の労作の大きさ･深さにも驚く結果となった。自分が20才から30才の頃にどんなことをしていたのかを思い出してみると、著者小野勝美の仕事の大きさと価値が、いっそう大きなものに見えた。
原阿佐緒記念館に送った「寄付の打診」の書簡への応答は、三ヶ月を経ても届かず、そろそろ廃棄の最終決断が必要な時期になった 7 月のある週末････、
玄関のチャイムが鳴り、見知らぬ男性が訪ねてきた。宮城県大和町の教育委員会から来たFさんと言い、カバンから取り出した資料を開きながら語り始めた。
4 月中旬の寄付の申し出について、謝辞と返信が遅れたことへの謝罪の言葉があり、結論として、「寄付をお受けして資料館で有効活用したい」という趣旨のお話だった。
寄付にあたっての書類手続き等の説明を受け、別途こちらから郵送するということになった。
外出予定時刻が迫っていて充分な時間が割けず、玄関先の応対という失礼な対応になってしまったが、Fさんの話しぶりは、1～2 時間茶飲み話をしたくなるような内容だった。
Fさんは、三連休を利用して知人を訪ねて鎌ケ谷市へ向かう途中で立ち寄って下さったということだった。酷暑の日に、400Km余の距離を車で走って来たFさんが、汗をふきながら説明を続ける姿に、何とも言えぬ達成感を感じた。
と言うような次第で、母の書架から出た二冊の書籍は、様々な奇縁のつながりを経て、宮城県黒川郡大和町の「原阿佐緒記念館」で次なる歩みを始めることになった。

以上

●年 表

年（西暦）	1900 年						2000 年		
原阿佐緒	1888				1969				
小野勝美				1944				2021	
私				1944					
私の母		1912					2002		
私の祖母	1891				1968				

▲ 明治維新　▲ 日清戦争　▲日露戦争　▲満州事変　▲関東大震災　▲終戦　▲「原阿佐緒の生涯」出版

＊関連資料：二冊の書籍といくつかの奇縁 その 1 「女流歌人原阿佐緒の生涯」
http://www1.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/haraasa1.pdf